犬

島崎藤村

青空文庫

　此節私はよく行く小さな洋食屋がある。あそこの鯛ちり、こゝの蜆汁、といふ風によく猟つて歩いた私は大きな飲食店などにも飽き果てゝ、その薄汚い町中の洋食屋に我儘の言へる隠れ家を見つけて置いた。青く塗つた窓際には夏からあるレエスの色の褪めたのが掛つて居る。十二月らしい光線は溝板の外の方から射し入つて、汚点の着いた白い布の掛つた食卓の上を照して居る。そこに私は下駄穿きのまゝ腰掛けた。

　一生のさかりといふべき私の三十代は数日のうちに尽きようとして居る。何となく静止して居られないやうな気がする。私は厭はしい日のみ続いた斯の一年を忘れるといふよりも、三十歳の終りのしかも誕生にあたる日に、用事ありげな人達が窓の外を往つたり来たりする寒い年の暮の空気の中で、独り半生の悔恨に耽らうとした。私は今日まで逢ひ過ぎるほど逢つたいろ〳〵な男や女の顔を見るにも堪へない。さうかと言つて、斯の洋食屋から半町とない大川の水が鉄橋の下にある石の柱の方へ渦巻き流れて行くその岸の引き入れられるやうな眺めを見るにも堪へない。眼前にあるソースや辛の入物だの、ごちや〳〵置べた洋酒の瓶だの、壁紙で貼りつめた壁だの、その壁にかゝる粗末の額、ビイルの広告などは、反つて私の身を置く場所に適しかつた。

　私は人並に賢い人間のつもりで居た。けれども今といふ今になつて、つく〳〵〝〵〵自分の愚劣なことを知つた。私には何卒して一生のうちに自伝を書いて見たいといふ心があつた。恐らく斯の心は私ばかりではあるまいと思ふ。丁度私のやうにして半生を費して来たものは、自伝の到るところに得々として女の名を書きつけ容貌の好し悪し、気立、年齢、触れた肌のかず〳〵、其他愚かしいことの多ければ多いほど寧ろそれを誇りとしたであらうと思ふ。そして、読返して見て、斯の通り自分が愚かしい、しかしこれより愚かでないと言へる人間があるか、と問ひ返すであらうと思ふ。世にこれほど自分の愚劣を表白することはあるまい。私は今に成つて、見物の喝采の前に自分の為したことを舞台の上で繰返して見せる年老いた毒婦の心を読むことが出来る。

　私には人に愛せらるゝ性質があつた、人の心を引くに足るだけの容貌もあつた。自分で言ふも異なものではあるが、私はよく手入れをした髪と、隆い筋の通つた鼻と、浅黒くはあるがしかしきめの細い光沢のある皮膚とを持つて居た。のみならず、いかにせば斯の容貌を用ふべきかといふことをも知つて居た。私には又、若々しさがあつた。力があつた。殊に私は婦人の前で自分を大きくして見せ得る不思議な力と、慇懃を失はない程度で大胆に勝手に振舞ひ得る快活さとをも持つて居た。斯うして私は何事も自分等の為ることを考へて見たことも無いやうな、慣れて知らずに居る人達に取巻かれて、唯青春の血潮の湧き立つまゝに快楽を追ひ求めた。私は求めたものが与へらるゝばかりでなく、求めないものまでも与へらるゝのを知つて、人知れず自分の幸福を思つて見た。私は自分の精力も根気もすべて空しく費し尽すまゝに任せた。今のやうな悔恨、悲痛が、しかも斯の年頃に自分を待つとは知らずに。そのことに私が気がついた時は、私は自分で自分を深く呪ふより外に仕方の無いやうなものと成つた。私は今、漸く三十代を終つたばかりの人間だ。それだのに、私の身体は最早老人のやうに変つて震へて来た。

　白い汚れた前垂を掛けたボーイは私の前に肉差や匙を置いて、暗

い暖簾の掛つた方から牡蠣のスウプを運んで来た。私は酒はあまり遣らない方だから、すこし甘口ではあるが白葡萄酒の玻璃盃に一ぱい注いであるのを前に置いて、それをすこしづゝ遣つたり、乳色のした牡蠣の汁を啜つたり、それから暖簾の奥の方でコックのさせる物音や脂肪のヂリ〳〵煮える音を聞いたりしながら、夢のやうに過ぎ去つた年月のことを胸に浮べて見た。

ボーイが汁の皿と入れ替へてメンチ物を一皿持つて来た。私の心はずつと少年の昔に帰つて行つた。漸く物心のついた、まだ〳〵無邪気な、幼い、物に驚き易い日のことに帰つて行つた。平素めつたに思出した例も無いやうなことが、しかも昨日あつたことゝ言ふよりも今日あつたことのやうに、生々と浮んで来た。

何事も知らずに世の中へ出て来た私を仮りに生徒とすれば、その少年の生徒の前へ来て種々なことを教へて呉れた教師が誰だつたか、私は肉差の音をカチヤカチヤさせながら皿の上の料理を味ひ〳〵其様なことを考へた。そして、その教師が厳格な目上の人達でなくて、つぎ〳〵に変つて行つた下婢であることを思出した。ある下婢は私の前に立つて、私が学校などで見たことも無いやうな本を懐から取出して見せたことも有つた。そして、これは女の持つものだといふことを私に話して聞かせて呉れた。ある下婢はまことに人の好いものでは有つたが、しかし心の浮々とした女で、長く奉公する間には幾度となく失策をして、その度に詫を入れて来た。私はその女のかんざしを挿した髪の上から鼠色の頭巾を冠つた形が端の尖つた擬宝珠によく似て居たことを覚えて居る。「あれがお由の色男だ」とその女の名を言つて、家の人が私にある時計屋の職人を指して見せたことが有つた。私は初めて「色男」といふ言葉を覚えた。ある下婢はまた、奉公するものに似合はないほどの器量好しで、髪なども黒く房々として居たが、時とすると私の見て居る前で主人に調戯はれて、「あれ、御新造さん、いけません」と叫ぶやうに言つたことがあつた。女は僅かの間しか奉公して居なかつたが、それと入れ替りに色の黒い、言葉に訛りのある、私の一番嫌ひであつた下婢が来た。田舎から奉公に来て居るとかで、時々亭主らしい百姓風の若い男がそつと訪ねて来た。そのことは家中の誰よりも一番よく私が知つて居た。といふは、下婢が私を前に置いて、半分述懐するやうな調子で、種々と男のことを私に話して聞かせたから。

私は愚かしいものだが、正直な人間ではあるつもりだ。しかし、私の記憶は私以上に正直だ。いろ〳〵な大人の為ることを見たり聞いたりしても、其頃の私は直にそれを見倣はうとはしないで、唯自分で自分に知れる程度に止めて置いた。私の知らないやうなことを一番多く私に注ぎ込んで呉れたのは、一番私の嫌ひな下婢だつた。ある晩、私は女に呼び起されて、黙つて寝た振をしながら独りで可恐しく震へて居たことも有つた。女は間もなく暇を取つて男と一緒に国の方へ帰つて行つた。

その後へ頬の紅い、まる〳〵と肥つた、辛棒強く働く下婢が雇はれて来た。誰にでも好かれて、少年の私も一番よく馴染んだことを覚えて居る。斯の下婢は私のところへ来て、すこし皺枯れたやうな、女らしい声で、みだらな流行唄をよく私に唄つて聞かせた。どうかすると女自身ですら自分の声に聞き恍れるほど巧みに唄つた。私も耳を傾けて、知らない世界の方へ連れられて行くやうな気がした。

ボーイが別の皿を運んで来た。丁度そこへ表口の溝板の方から犬が二匹ばかり電話口の前を廻つて私の腰掛けて居る側へ来た。皿の

上のものを欲しさうな顔附をして、側に附いて居られるのもうるさく、すこし追つて見た位で屋外へ出て行く様子も無い。私は犬の方へ関はずにナイフを取上げた。二匹とも白いやつで、客のない食卓の下の方を嗅ぎ尋ねるやうに歩き廻つて、復た私の物を食ふ側へ来た。

「まさか、犬から物を習つた覚えは無いよ。」

と私はそこに誰か話相手でもあるやうに、自分で自分に独語を言つて見た。私が「まさか」と言つて見たのは、あの下婢ばかりでなくて、犬もまた自分の教師であつたことを心の底に否むことが出来なかつたからで。

頭から目の上あたりまで白い毛の長く垂下がつた狆のすがたがはつきり胸に浮んで来た。屋の内で飼はれて居た獣は、ある時は少年時代の友達のやうに、ある時は極く無気味なものゝやうに、私の眼前をよく往つたり来たりした。私は今でもあの小柄な、性質の賢い狆が、頭の毛を振つたり尻毛を振つたりしながら畳の上を歩き廻つたその足音を聞くことが出来るやうな気がする。

「斯の犬には人間の言葉が解る。」

と言つて家のものは笑つたことすらある。それほどよく人に慣れて居た。あの首をすこし傾けて私達の前にかしこまつた様子は、人の表情を読むことを知つて居るとしか思はれなかつた。私はあの長い房々とした毛のかげにある怜悧さうな眼からよく涙の流れたことを覚えて居る。それから毛が汚れて穢くなつたと言つて、嫌がるやつを無理に盥に入れて、石鹸をつけてごし〳〵洗つて遣ると、鼻をクンクン言はせながら鳴き騒いだことを覚えて居る。濡れた時はずつと小さく見えた。その時ばかりは眼もあらはれた。毛の乾くのを待つて居られないといふ風に、家中馳けずり廻つて、小さな体を到るところに擦りつけて、ごろ〳〵部屋の内を転がつて歩いた。どうかすると、その濡れた毛を人の前でブル〳〵させて、無遠慮な雫を飛ばしてよこした。表の方に人でもあると、それが客であるか、家のものであるかは足音で聞き知つて居て、真先に飛出して行くのもあの狆だつた。

呼ぶと、嬉しさうな声で鳴いて、よく私の方へ来た。狆は私の手に抱かれながら、鼻と言はず、口と言はず、長い舌で私の顔中ベロ〳〵嘗め廻さなければ承知しなかつた。それが私に対する親愛の表情だつた。私はそれには閉口して、いつでも顔だけ除けては膝の上に乗せた。

斯の狆の種を得たいと言つて、同じやうな美しい毛並の牝を引連れて来る人もあつた。時とすると狆は人の習慣を無視する動物の本性に反つて、殆んど本能的に私のまはりを狂つて歩いた。私が人であるか犬であるかの見さかひすらも忘れて了つたかのやうに。

「お後は何にいたしませう。何かサツパリとしたものでも。」

とボーイは私の傍へ来て手をもみながら言つた。

急に日が濃く窓から射して来た。何となく部屋の板敷の日蔭に成つたところは寒く感ぜられた。私は耳が鳴つたり腰が痛んだりする自分に返つて、それが身に附き纏ふ持病のやうに離れないことを思つて見た時は、一種の悪寒を覚えた。洋食の出前持は堅い靴の音をさせながら溝板のところを出たり入つたりして居た。私は食卓の布の上に爪の延びた手を置いて、あの前垂掛で雑巾を手にしたやうな無智な下婢達と犬とから、斯うした自分を先づ教育されたことを考へて、思はず微笑まずには居られなかつた。

ボーイは熱くした紅茶をこぼさないやうにと用心しながら私の前へ持ち運んで来た。うるさい二匹の犬は私がそれを飲み終るまでも側(そば)に附いて眺めて居た。

青空文庫情報

底本：「筑摩全集類聚　島崎藤村全集第五巻」筑摩書房
　　1981（昭和56）年5月20日初版第1刷発行
初出：「中央公論」
　　1913（大正2）年1月
入力：林幸雄
校正：岩尾葵
2018年2月25日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

犬

島崎藤村

2026年10月1日　第二版

奥　付

発行　　青空文庫

URL　　http://www.aozora.gr.jp/
E-Mail　　info@aozora.gr.jp

作成　　青空ヘルパー　　赤鬼@BFSU
URL　　https://aohelp.club/
BiliBili　　https://space.bilibili.com/10060483

Special Thanks
　青空文庫　威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー http://aohelp.club/
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
http://tokimi.sylphid.jp/